

## 張龍鶴 小説研究

——「円形の伝説」を中心に——

世古口 真

### 要 旨

韓国文学史において長編小説の占める文学的な位置は解放前後を中心に大きく分離され、別の方法で評価を試みている。即ち、解放以前の日本植民地時代の長編小説は民族主義であれ、社会主義であれ、精神史的側面から民族史と関連して評価しているが、それ以後の特に、朝鮮戦争以後の1950年代の長編小説は実存主義や神話批評的な観点など人間存在の解明を図る分析を試みている。

このような文学史研究上の差異は作家の文学的選択とも深い関連がある。解放以前の作家が文学という行為がある程度は民族独立の一つの試みとして考えられたのに関連され、以後の戦後作家の場合は朝鮮戦争により喪失した人間の尊厳性回復のための努力の手段としてみせた試みであるという点である。

1950年代、戦後の長編小説は戦争の初期すべての文学的認識と方法を再考しなければならなかった時期から60年代まで現実を認識する方法と形象化する方法を発展させてきたが、このような発展が60年代に続く文学史の一過程として十分な機能を果たしてきた。

本稿ではこのような観点によって長編小説に現われる内在的な発展と変化の過程を戦後作家の中では独自の作家意識を持つ張龍鶴の、小説としては特異な傾向を帯びる「円形の伝説」という長編小説を中心に作家意識、作品内容、作品の形象化の原理とともに検討し、作品の中の作家の視角と形象化の相互関係を糾明しながら戦後文学において

現実認識を確保していく過程として、その特性の一断面を考察するのを目的とする。

キーワード：戦後新世代、虚偽、現実否定、実在、文学の現代性

### 戦後新世代と張龍鶴

張龍鶴<sup>1)</sup>の小説は戦後作家の中でも特異な小説の一つとして数えられる。彼の小説は大部分、内面意識の流れ、難解な観念体の文章、プロットを無視する特異な展開方式、寓話とアレゴリーの神秘的なイメージを通じ、それ以前の小説ではみる事のできない特異な小説様式をみせている。このような小説形式は戦後初期の既成世代<sup>2)</sup>の作品ではみる事のできないもので、その特殊性によって文壇の格別な注目を集めた。張龍鶴の小説は技法の特異性とともに関成倫理としては受け入れられない反伝統、反モラルの性格を持っており、このような性格を通して戦後、韓国文壇の再編成とともに新しい文学観、新しい世界観を形成する新世代の特性を一番顕著に表わしていた。それまでにはみる事のできなかったこのような方法は戦後現実の中で、現実の外側だけをはぎ取る事には余念のなかった当時の作品傾向としては明らかに衝撃的なものであって、既関の安易な現実の解釈と文学的表現に対し、反抗と新しい挑戦としても十分なものであった。

実際に張龍鶴の小説はそれ以前にはなかった戦後社会現実に対する根本的な懐疑と「生」の条件に対する反抗がその裏面にあり、これを基盤にして新しい人間解釈と新しい文学的方法を全面に提起している。彼の創作傾向は明らかに戦争という人間存在の極限状態と戦後現実の不安な危機意識に土台を置いており、これにより人間の存在論的な自己回復の問題に関心を注いでいる。彼の作品で特に注目を集めるのは現代の物質文明に対する反抗、現実の規範意識の否定などは、すべてこのような戦後現実から存在の自己回復という課題と密接な関係を持つ。張龍鶴のこのような作品傾向は人間の根本的な存在条件を問題とするもので戦後現実を否定し、人間の「生」の条件をより理想的な空間に置こうという新世代的な問題意識をそのまま示している。彼の作品は戦後新世代作家たちが主張していた「題材の深刻性」切迫した現実に対応し、あがいている人間像の追求「人間内面の存在論的な本質に対する執着」等の特性をそのままみせており、これが現実の安易な描写から脱皮する戦後現実を新しく解釈しようという新世代の問題意識とそのままつながっている。<sup>3)</sup>ところがこの問題意識は現実それ自体を対象にし、それを克服しようというものではなく、張龍鶴の小説で言わんとしていた事はより超越的な人間の現実であって、現実の絶望と危

機に直面し、人間が置かれた実存的な条件とそれを総括する意味においてであった。言い換えると戦後現実の絶望的状况をより普遍的な人間条件の意味を確得しようというものであった。彼は現実の絶望と危機意識を切迫したものに感じ、その克服をより抽象的で根源的な方法で探していたのだ。彼の小説で具体的な現実の絶望と不安はいつでも現代文明の中の普遍的な人間条件として還元され、文学的技法は病的な現実を解体する自意識の実験として関連される。彼の小説のこのような抽象的な方法は根本的に既成世代の古い文学の方法に対し、反感と西欧文学の理念と方法を韓国文学の中に導入し、文学の‘現代性’を成立させようという新世代的‘知的虚偽性’と密接な関連を持つ。新世代たちは既成世代の文学的論理を近代的なものと意識し、それから脱け出し西欧文学と同じ現代性を確得するものだけが韓国文学の‘後進性’を克服できる方法としてみた。言い換えると彼らは従来の近代的文学概念を越え、現代的意識、世界的意識とすすむものを一つの文学的な指標としたのだ。新世代たちは“韓国文学において50年代文学は決別であり、出発”<sup>4)</sup>であるとか“世界文学の一部を成す事のできないものならば、それは韓国文学でもない。また文学といえる価値もないもの”<sup>5)</sup>といった伝統否定と文学の‘現代性’を果敢に掲げている。

このような意味で文学の‘現代性’は既成世代を否定し、彼らなりに新世代の性格を規定している普遍的なものをさしにしている。事実、新世代作家たちが掲げた文学の‘現代性’は明らかに20世紀的な西欧現実の意識と文学的方法であったのは言うまでもない。特に新世代の理念の基盤を形成したのは第一次世界大戦以後に現われた合理性に対する批判、理想に対する批判に根拠する反文明的視角であった。啓蒙思想以後から持続された理念中心的、あるいは合理主義的傾向に反発し、人間の存在自体に関心を回帰するもの、即ち人間を絶対的存在として希求する実存的な課題に対し、関心を表明するものであった。そのような面で李英一（イ・ヨンイル）<sup>6)</sup>は50年代文学の関心は“現代文明に対する、または極端主義的な理想主義に対する実証社会学に対する反省と再確認”であり、“メカニズム文明化と前提化に従う人間の不幸と不安”を防ぐところにあると言っている。<sup>7)</sup>張龍鶴はこのような新世代的‘現代性’と一番密接な関係を持つ<sup>8)</sup>むしろ新世代的特性と関連させてみると張龍鶴こそ一番新世代らしい作家だといえる。彼は新世代の‘現代性’を積極的に強調して既成世代の文学的論理を批判するのをためらわなかった。彼が既成世代の文学的方法をどれだけ嫌悪していたか、そして西文学的方法の中で韓国文学の‘現代性’を成立させようという新世代的な文学論理をどれだけ擁護したかは彼の既成世代の文学を自然主義的なものに追いやり、近代的で旧時代的な文学論理だと辛辣に批判していて、<sup>9)</sup>これに対し新世代の文学こそ韓国文学の‘現代性’を可能にする主流文学にならなければならないと言っている。彼は新世代の文学がただ西文学の模倣に過ぎないという批判に対し、新世代こそ‘自然主義を排撃し、存在を作品世界の中にとり入れ、フィクショ

ンに終止符をうち、人物の描写で人間の救援へと創作活動の焦点を移し置いた<sup>10)</sup>と新世代を擁護する。そしてこの新世代が持つ性格こそが‘本当のリアリティー’であると強調している。

반자연주의, 자연주의를 배격한다고 해서 레알리티를 배격한다는 것은 아닐 것이다.

자연주의적 레알리티 만이 레알리티가 아니라는 것이다. 일상적 눈에 비쳐 드는 것에만 레알리티가 있는 것은 아니라는 것이다. 과학만능을 신봉하는 다이내마이트 시절의 레알리티는 원자탄과 신화의 계절인 오늘날의 레알리티가 되기는 어렵다는 것이다. (중략) 그들 (기성세대－필자) 과 우리가 살고 있는 세계가 다르다. 그들이 돌리워 싸인 것은 소위 ‘환경’ 이어서 그들은 그것을 관찰하였지만 우리는 ‘메카니즘’ 속에서 호흡하고 있다. 그들의 불행은 ‘유전 (遺傳)’에서 온 것이지만 우리의 그것은 부조리에서 온 것이다.<sup>11)</sup>

(反自然主義, 自然主義を排撃するといってリアリティーを排撃するという事ではない。自然主義的リアリティーだけがリアリティーではないという事だ。日常的に目に入り込むものだけにリアリティーがあるのではないという事だ。科学万能を信奉するダイナマイト時代のリアリティーは原子弾と神話の時世である今日のリアリティーになるのは難しいのだ。(中略) 彼ら (既成世代－訳者) と我々が住んでいる世界が違う。彼らを取り囲まれているのはいわゆる ‘環境’ であり、彼らはそれを観察したが我々は ‘メカニズム’ の中で呼吸している。彼らの不幸は ‘遺伝’ から来たものだが我々のそれは不条理から来たものだ。

張龍鶴がみた ‘リアリティー’ は不安と虚無を基盤にした世紀末的な西欧現実であった。そしてこのような視覚からみる時、戦後の韓国の現実こそ世紀末的な状況それ自体になる。彼はドストエフスキーからサルトルに至る西欧の憂鬱で沈鬱な世界認識を受け入れ<sup>12)</sup>これを戦後現実の絶望意識と不安意識にそのまま適用させたのだ。彼の作品に現われる現実に反抗的でありながら、絶望と挫折する現代人の姿、孤立者の姿、または機械文明と物質文明に対する人間の疎外された姿はまさにこれと同じ西欧文学の世紀末的な思想をそのまま韓国の現実の中に受け入れ、その中で漠然とではあるが文学の ‘現代性’ とその人間性の意味を取り入れたためである。<sup>13)</sup>

張龍鶴の小説の特異性はこのように西欧の世紀末的な文学意識を具体的に韓国現実のも

のとして作りあげようという彼の‘知的虚偽性’の中で具体的に解明される。“池に小舟を浮かべ、ヤンサンド（京畿道民謡）を歌うのも良い。しかし世界の落後者になってまでもヤンサンドを歌うよりは、むしろヤンサンドも捨てる<sup>14)</sup>と唱える知的な傲慢と虚偽性、西欧文学への追随主義の中ではじめて彼の文学が追求する世界と方法を理解できるのである。張龍鶴の作品の中で現われる人物描写、プロット、背景などの新しさは”自然主義の遺族の間から私生児のように突然に出現した<sup>15)</sup>のだが、それはすでにデカダニスの技法を文学の‘現代性’に転換しよとした彼の性急なモダニズム追求意識の一断面をみせるものであり、現実を抽象化し、現実の具体性を西欧文明の普遍性として扱おうとする新世代文学の特性をそのまま表しているに過ぎない。

一般的に張龍鶴を意識と技法の両側面で照明しなければならない作家<sup>16)</sup>と規定するのもまさにこのような彼の特性に由来する。彼の小説が1950年代の戦後現実の不安と危機意識を克明に反映していながら、それが徹底して存在論的な観念の中に閉じ込められ、伝統的な小説技法を無視する反小説的な特性を示しているのもそれと関係している。張龍鶴の小説を分析するのに一番重要な問題になるのは実存主義との関連性、小説の意味する内容の問題、既存の小説と違う技法の問題等もこれと同じ西欧的方法とその抽象的な適用の中で解明される<sup>17)</sup>。彼が韓国の現実をどのように絶望的で虚無的にみていたかという問題とこのような危機的な現実意識をどのように超越的で普遍的な問題に転換するかといった問題は結局その時代の知性が持っていた知的虚偽性とモダニズム的な代替理念の中で糾明されるもので、そのため彼の小説がどのように既成世代の小説とはまた違う方法で現実を抽象化させ、現実の展望を無力化させているかを探っていく事ができる。

張龍鶴の小説は1950年代にかけ、大きく変貌していない。53年「찢어진 윤리학의 근본문제」(盛れた倫理学の根本問題)から54年「부활미수」(復活未遂)、55年「요한서집」(ヨハネ詩集)、56年「비인탄생」(非人誕生)、「역성서설」(易性序説)、60年「현대의 야」, 62年「원형의 전설」(円形の伝説)に至るまで彼の中心になる問題は絶え間なく現代メカニズムの中で喪失された人間の根本価値を回復しようというもので具体的に彼の代表作といえる「ヨハネ詩集」では存在の自覚と限界の状況の問題、「非人誕生」と「易性序説」では物質文明の中で経験する人間の精神的な外傷と反抗の問題、「現代の野」ではイデオロギー的なメカニズムの桎梏と人間の疎外問題などを全般的に扱っている。「円形の伝説」では、これらすべての問題を結合させようとし、これを通じて人間の存在する状況とそれを超えて克服の問題をとり扱おうとした。彼が描こうとするものは主に現代人の精神的な外傷でこの状況を作った現実世界を否定し、さらに超越しようという理想の世界である。「円形の伝説」が1962年に創作されていながら徹底して1950年代の新世代的な考え方を脱け出せないでいるのもこのような特性のためである。

## 叙事構造とその意味

張龍鶴の「円形の伝説」は現代の機械文明に対する反抗、既成価値と倫理に対する反抗などを通して物質文明の中で人間存在の姿を糾明しようとした長編小説である。彼の小説が追求している根本的な問い、即ち現実社会の普遍的な人間条件、人間存在の意味を探求しようとした。彼は朝鮮戦争の複雑な状況と戦後の不安、絶望の現状を結合させ、これを一つの大きな叙事装置として再構成し、問いに対する答えを探そうとしている。小説には私生児である李章（イ・ジャン）を主人公に登場させ、自分の出生背景を探していくストーリーを通じ、自分の運命的な存在を自覚する過程に展開される。作家はこのようなストーリーを中心に現代社会で人間存在の問題と彼の反近代的な思想とともに提示している。このような面で「円形の伝説」は戦後の絶望的な存在条件を根拠にして人間が置かれている普遍的な存在、実在的な存在の問題意識に続いている。「円形の伝説」で張龍鶴のこのような問題意識は特異な方法で提起される。小説の意図が不条理な人間関係に反抗し、世界状況の虚偽性を告発するのに人物の「生」と運命を通じて主題を提起する方法とは根本的に反する。小説では主人公イ・ジャンがとるその時その時の行為、対話自体がまさに世界の虚偽性を構成し、それを直接告発する形式を帯びている。即ち、近親相姦によって生まれたイ・ジャンの出生秘密その秘密を明らかにする過程、イ・ジャンが結ぶ人間関係、対話そしてイ・ジャン自身が直接、近親相姦を行う事で死を選ぶという叙事過程が既成世代の倫理を拒否し、破壊する形式をとっている。またこのような叙事過程だけでなく叙述過程にも所々に現われる観念的叙述と観念的な対話を通し、既成世代に対する反抗の意味を直接浮き彫りにさせる。叙事の進行が叙述する話し手によって直接提示されるもの、そして叙述する話し手がまさに作家自身だという点を直接露出させるのも作家自身が直接、状況を構成し、主題を提示しようという意図と密接な関連を持っている。「円形の伝説」で叙事過程が複雑に感じられるのはこのように主題を直接提示しようという作家の意図と干渉のためである。小説は基本的にイ・ジャンの「生」を通じた叙事進行ですすみ、途中で複雑に絡んだ観念的な叙述はイ・ジャンの突拍子もない行為と結合させ叙事自体をも、もつれさせ複雑にする。従って基本的な叙事は作家の観念的な叙述の中間に提示される事件の進行する提示を通じ、現れるがこれは綿密に観察しないと理解できない。読者は一方では作家が提示する観念的な叙述の意味を理解せねばならず、一方では叙述する話し手によって提示される叙事の流れを綿密に把握しなければならない二重の認識構造の中に置かれる事になる。

まずこのような過程が複雑に絡み合っているため小説の基本ストーリーからみると主人公イ・ジャンが養父イ・トムが死ぬ直前に聞かせてくれた父親に対する話から自分の

出生秘密を一つずつ明らかにしていく過程に進行する。作品の前半部は戦争の勃発と共に死んだ養父イ・トムを通じ、自分が養子であることを知り、自分の過去を探しに行くという展開になる。この過程で人民軍専任下士官から自分の出生地であるパングル村の伝説を聞き、自分の出生秘密に対する疑惑はだんだんと大きくなる。作品中盤は北（北朝鮮）でスパイ教育を受けた後、南へ派遣され、韓国での生活が展開される。父親である呉澤富（オ・テップ）の娘、安芝夜（アン・ジャ [マダムパタフライ]）と出会い、自分の母親である起美（キミ）の昔の恋人、玄晩雨（ヒョン・マヌ）から自分の父親がオ・テップであるという事実、そして近親相姦によって生まれた事を確認する。作品後半部はこのような出生秘密が明らかになるにつれ、北の妹アン・ジャとの近親相姦を通じ、オ・テップに復讐し、自分が死んでいく過程が展開される。作品でこのような過程は北と南を往来し、多少混乱させながら展開するため要約すると次のようになる。

（第一章）

- (1) 朝鮮戦争勃発（養父母から私生児である事を確認する。）
- (2) 義勇軍入隊（人民軍下士官からパングル村の伝説を確認する。）
- (3) 国軍に編入（鴨緑江 後退中に落伍する。）

（第二章）

- (4) 獵師ひげ老人により救出される（近親相姦で妊娠した倫姫（コンヒ）との出会い）
- (5) 休戦以後 北に残る。（炭鉱，大学教員生活）

（第三章）

- (6) スパイ教育を受けた後、南へ派遣される。  
（大学教員生活）
- (7) マダム パタフライ（安芝夜（アン・ジャ）、ヒョン・スンウ・ユンジャとの出会い。  
スパイ生活に懐疑心を抱く。）
- (8) 母親の昔の恋人ヒョン・マヌとの出会い。（自分の父親がオ・テップである事を確認する。）

（第四章）

- (9) オ・テップにより洞窟に監禁される。（オ・テップの息子を通じ、近親相姦を確認する。）

（第五章）

- (10) 洞窟脱出（アン・ジャに求婚する。）

（第六章）

- (11) オ・テップに結婚した事実を教える。（オ・テップから近親相姦の事実を暗示される。）
- (12) 洞窟に新婚旅行する。（洞窟でオ・テップ，アン・ジャの死）

小説全体は七章から成り立っており、一、二章が戦争とスパイとして南へ渡る直前まで、四、五・六章が南での生活のため大部分の叙事展開は南へ渡った後、アン・ジャとの出会い、ヒョン・マヌから確認した自分の出生秘密の確認、そしてこれに対する復讐の過程に続く。叙事展開が物語が進むにつれ、遅くなり混乱してくるのは中間に観念的な叙述が多くなるためである。小説は近親相姦により生まれたイ・ジャンが近親相姦により死に行く過程で展開されていく。不合理な人間社会を経験し、以後それに反抗する生活をしていて自分もやはり近親相姦により終結する。この過程は始まりと終わりが再び元の場所に戻るしかないという叙事過程の還元構造をみせている。この作品の冒頭でこの物語が一つの伝説である事と伝説は主人公の出生とともに始まり、主人公の死で終わる事を暗示している。即ち、作家は伝説上の人物を設定し、その人物の「生」を通し、自分の考えを広げていくという意図を明らかにしている。従って小説は一人の人物が世の外側から来て、世の中を体験し、世の外に出て行くという過程で成り立ち、この人物がこの世で紆余曲折を経る過程が一つのアレゴリー的な構造を帯びながら世界の虚偽的性格を暴露するという形をとっている。「円形の伝説」の叙事展開が複雑であっても実際には一人物の一代記に過ぎない。この叙事過程は小説で作家が世界をみる視覚と密接に関連するのだが現在の世界を人間が真正な意味で自分の存在を確認して生きては行けない空間に設定する。作品ではこのような世界の性格を‘人間的’だと表現する<sup>18)</sup>そしてこの‘人間的’世界に対する拒否と反抗を通して脱出する事だけが真正な人間の姿、即ち‘人間’の世界を求める道だとしている。従って叙事は‘人間’の世界から来て‘人間的’世界を経験し、再び‘人間’の世界に戻るという過程をみせ、これを媒介するのが主人公の死である<sup>19)</sup>叙事の進行のこのような特性を整理すると次のようになる。

## (1) [物語]

主人公イ・ジャン、近親相姦により出生

(出生の秘密を探す)

近親相姦により死亡する。

## (2) [主題]

‘人間’の世界

‘人間的’世界 (世界に対する拒否, 反抗)

‘人間’の世界

## (3) [叙述の進行]

伝説の始まり

(アレゴリー構造)

伝説の終わり

(1) [物語] では近親相姦で出生したイ・ジャンが自分の出生秘密を探し、近親相姦で死んで行く過程に至る。ここで近親相姦のモチーフは世の中の倫理、規範の破壊を意味するもので世界に対する完全な否定を象徴する。(2) [主題] は‘人間的’世界に対する暴露、拒否と反抗でイ・ジャンがこの世に生まれ、経験する空間が‘人間的’世界の実状で作家はこれをイ・ジャンの生活、観念的な叙述などの装置により直説法で表わす。世界に対する完全な拒否は結局イ・ジャンの死によって完成されるが、これによりイ・ジャンは真正の‘人間’の世界に入って行く事ができる。即ち、現実世界の完全な否定は死しかないのみなのだ。(3) [叙述の進行] は作品の冒頭にこの小説が伝説である事を暗示する叙述する話し手の直接的な表現が現れ、物語の最後、イ・ジャンの死で伝説が終わったのを直接、表現している。これにより小説の叙事構造は一つの伝説、即ちアレゴリー的な構造を帯びる。従ってイ・ジャンの「生」を中心に全体のストーリーもやはり人為的な世界を告発するアレゴリー的な意味を持つ。

実存的問題意識と現実否定

(1) 実存的問題意識

張龍鶴の作品世界は人間の世界の中において限界状況の中での実存的意識の発見から始まる。彼は「ヨハネ詩集」がサルトルの『嘔吐』を摸倣したものだと言っている<sup>20)</sup>。彼が『嘔吐』と同じ実存主義の文学を通じ、具体的に感じたのは事物を見る‘目’であった。例を挙げると‘入って来る物’は事物の角度によって‘出て行く物になるという事’<sup>21)</sup>あるいは‘ $1+1=2$ の世界で  $1+1=3$ の世界が公然と恣行されているために  $1+1=3$ の世界を掲望するもの事体がまさに  $1+1=2$ の世界を渴望するものになる。’<sup>22)</sup>という認識と発想の転換を図っている。そしてさらには彼はこのような認識と発想の転換を現代文明の中に存在論的な自覚、実在的な状況の認識と深く結びつけている。小さなどうでも良いと思える事でさえ、この問題意識は根本的に現代社会を実存の限界的状況としてみようという彼の認識と噛み合っている。現代のメカニズムの社会がより以上、人間を人間らしくする存在論的な状況とは程遠いという事、サルトルの表現のままに‘存在が本質を先行する。’なら‘存在’こそ現代物質文明の世界に拘束される人間の本質とは距離があるという事、それがその論理の焦点である<sup>23)</sup>。そういう面で彼は現代社会の認識と発想をすべてひっくり返す否定と反転の思考を必要とする。

새로운 것이 있다면 이런 모색 위에는 새로운 질서를 세워서 현실적으로 현실서와 대치시켜보자는 어쩔 수 없는 그 반역성(叛逆性)에 있는 것인 지도 모른다. 어떤 사람은 그런 것을 캐내서 무슨 소용이 있겠는가, 병적 희롱이라고 비난하겠지만, 현실이 병(病)적인데 거울에 비쳐든 그림자가 병(病)적이 아니면 오히려 그 거울이 병(病)적일 것이고... (중략).. 사람은 미지를 동경하는 병(病)은 가지고 있다. 병(病)은 나쁘지만 병(病)은 사실이다.<sup>24)</sup>

(新しい物があるところのような摸索の上に新しい秩序をうち立て、現実的に現秩序と置き換えてみようというどうしようもないその反逆性にあるのかもかもしれない。ある人はそんな物を掘り出して何の役に立つのか、病的な戯弄だと批難するが、現実が病的であり鏡に照らされる影が病的でないのなら、むしろ鏡が病的であり... (中略) ...人は未知を憧憬する病を持っている。病は悪いけれど病は事実である。)

彼の論点は現実が矛盾と不条理の病的世界であり, その病的世界に対する告発と反抗こそ眞正な存在の姿を探すためのもので, またそれが現実を現実らしく描写する方法であるという。従って彼は今日の文学が行わなければならないものは人間の世界が作ったメカニズム(病的現実)から人間を救出するもの, 即ち“合理的 人間性 から人間を救出する人間主義の意欲”でなければならないと言っている。<sup>25)</sup> 그가‘合理的 人間性’という言葉を使用するのは根本的に人間の存在条件を束縛するものが現代文明的な思考だという事を念頭に置いているためだ。彼はこのような文明的束縛から抜け出す時, 本当の人間の姿が産み出されるとみていて, このために絶え間なく政治, 社会制度, 道徳, 倫理のような既存のメカニズムを否定し, 拒否しなければならなかった。彼の作品で現れる‘存在の自覚’というのはまさにこのような現実を認識するものでこの現実を否定し, 抜け出す事である。しかしこの現実否定と反抗は結局, 現実を抜け出す超越的な空間から回帰する事を意味し, これで具体的な人間の姿は喪失されてしまう。彼の小説が新しい物もないただ一つの事実, 即ち‘人間の発見’がすなわち‘人間の喪失’を意味するという命題<sup>26)</sup>から始まっているのもこのためである。

## (2) 反文明的視角

張龍鶴が現実世界を病的な世界として促えている事, そして人間がその世界から眞正の自己存在を探すためには既存のメカニズムに絶え間なく反抗し, 否定しなければならないという認識は作品の中で現実世界に対する否定, 即ち既存の秩序と規律, 道徳と倫理の破壊として現れる。作品からイ・ジャンの「生」を通し, 文明のメカニズムが持つ人為性の

問題、制度とイデオロギーの虚偽性の問題、絶対的で普遍的な妥当性の認識が持つ虚構性の問題を提起するのもこのような既存の秩序の破壊と密接な関連がある。このような問題は前述したが作品の中で‘人間’と‘人間的’という対立構図を通して正式化される。彼は現実世界を構成するすべての価値体系も‘人間的’という意味の下に置き、この‘人間的の世界’がまさに人間を制圧し、人間を自由な存在にさせない根本要因になっているとみる。従って作品で既存秩序を構成するものはすべて‘人間的’な世界に該当し、これは真正な存在の世界である‘人間’の世界と対立し、否定され拒否されなければならない対象になる。

문제는 존재와 본질은 적대관계에 있다는 사실이다! <人間>과<人間的>은 서로 대적하고 있다는 사실이다! <人間的>은 獄이요, <人間>은 그 囚人. 囚人の 고행은自由다. 그는 자유를 期한다. <人間>은 反<人間的>이기를 주장한다.<sup>27)</sup>

(問題は存在と本質は敵対関係にあるという事実だ! <人間>と<人間的>は互いに敵対しているという事実だ! <人間的>は刑務所であり, <人間>は囚人, 囚人の故郷は自由だ. 彼は自由を期する. <人間>は反<人間的>である事を主張する!)

引用文はイ・ジャンがアン・ジャとの近親相姦を行うのに先立って自分の行為の妥当性を強調している部分である。イ・ジャンがみる世界がまさに囚人と同じ世界だったとしたら、その世界はまさに人間が決めた人間の制度による物質文明の恩恵で、張龍鶴の立場ではこのような物質的な制度、規範の社会が人間が追求する真正の存在の世界ではないというのだ。この点は‘存在が本質を正反対の関係にある’という命題に代えた事を意味する。

## 張龍鶴の世界観

### (1) 現実の抽象化

「円形の伝説」は抽象的で観念的な作家の理念が問題になっている小説である。作品では朝鮮戦争と戦後現実を背景にしているが、この形式は徹底して普遍的で抽象的な空間に還元される。主人公イ・ジャンの生活は歴史的激動期に経験しなけりなかつた当時の若者の一般的な生活と大差はなく、戦争の混乱の中で生きたイ・ジャンの「生」は自分の意志とは無関係に強要され、選択せざるを得なかつた当時の歴史的な状況をはっきり示している。作品の中でイ・ジャンが義勇軍にひっぱられ、人民軍の捕虜になる事など、そ

れ自体で一つの歴史的な具体性をとり入れている。作品の序盤で経験したイ・ジャンの「生」は左右イデオロギーの対立と戦争という急迫した現実下で生き残らねばならない個物的「生」の歴史的な意味が最低限生き残る事のできる空間的な意味を持っていた。しかしこのような戦争状況は作品の中では抽象的な空間にとって変わる。左右のイデオロギー対立は人為的な理念の対立に設定され、その中での「生」は純粹に虚偽的なものに転換される。戦争の現実には「単純に青い旗と赤い旗の虚偽の理念の闘い<sup>(28)</sup>」に過ぎないものになり、イ・ジャンが体験した苦難も現代文明の制度的な矛盾に帰着される。戦争の途中で起きるすべての非倫理的な行為も単純に現代の倫理は反倫理だという反規範的な視角の中で正当化される。

このように「円形の伝説」では、理解できない一つの不可解な現実として抽象化される過程をそのままみせている。また登場人物たちは社会と関係している正常な人間関係をみせるというより、いつでも分離され、孤立した環境の中で自分の存在論的な意味を抽象化する作業に縛られている。この小説の世界は歴史の動きと歴史の中に人間の「生」を決定する真正な条件から、またその裏面に隠された複雑な因果関係の相異なる社会的な闘争から抜け出して、これらはすべてが抽象的で普遍的な空間世界に転換されている。従って世界は人間の普遍的な存在の条件を一般化させる一つの象徴と記号体系の役割しかできないでいて、具体的で実際の「生」の目的からかけ離れた神秘的で幻想的な構造物として存在している。具体的に小説で数多くのアレゴリーとエピソード、観念的な叙述の中でその世界の意味を観念的ではあるが把握する事ができる。

## (2) 絶望的な意識と虚無

張龍鶴が現実をどのように考え、現実をどのように規定しているかというのは当時の現実に対する彼の認識から始まり、彼の作品で人間と社会、「生」と社会的な条件との間の葛藤は解決される事のない問題である事を明らかに示している。現実には動かしようのない巨大な神秘的な対象として規定されていて、その中で人間は孤立し、断絶されていた。現実そのどこにも希望の光が見えない時、すでに絶望と虚無主義は「生」自体の絶対的な属性に位置され、作品はこれを具体化される。従って現実の危機と不安に対する主観的な認識はすでに客観的で普遍的な実在になる。そしてそれは、どうしようもない絶望と恐怖として主観的な認識に引きつけられ、これは現実自体を否定し、抽象化させるしかない必然的な結果をもたらした。彼の作品が「普遍的な理想」だけを追求するアレゴリー的な方法を通じ、観念的で抽象的な理想世界に超越されるのもこれに起因する。彼の虚無主義は実際、1950年代の現実の中で経験した絶望と悲惨さから来ているのは事実であり、「非人誕生」と「喪笠新話」でこのような事実を具体的に示している。病床に臥している母親の死の前で社会的に、経済的にどんな口実も言えなかった自分の姿、越南し、どこにも安住す

ることのできない挫折した知識人の姿が具体的に描写されており、これは実際、彼の現実と大きくは違わないようだ<sup>29)</sup>。彼にとって現実とは絶望的状况で、彼は悲惨な現実からの出口を実存的存在の自覚を通じて、現実の超越として象徴化したのだ。彼が絶え間なく試みた超越的な理想世界は明らかに現実では成し遂げられない主観的領域の空間である。彼が現実的な「生」が持つ不安と絶望に苛まれながら、それを観念的であるにしる克服しようというのは「ヨハネ詩集」で世界と自己が何の懸念もなく調和のとれた根源的な故郷、幼少の頃に対する郷愁のような空間を欲したためだ。現実を目を向けた瞬間、その理念は虚無的に崩れ落ちるしかない事を知りながら、彼はその世界に対する夢をなかなか放棄しない。そしてその世界こそ個物的な認識が世界と分離される前に得られる即自的な認識の世界、即ち平穩な幼少の頃の空間であり、自分が夢見る事のできる最善の世界である。これは明らかに越南した新世代作家が共有していた‘先験としての故郷喪失’<sup>30)</sup>と密接な関連性があった。「円形の伝説」が具体的にイ・ジャンの‘根探し’をテーマにしているのもこれと関係している<sup>31)</sup>。彼の作品が機械文明に反抗し、制度的矛盾を通じ、人間不信、人間性抹殺の現代文明の現実を否定していながら、いつでも具体的な現実に対する直接的な批判ができず、超越で抽象化するのもこのような回帰意識こそが現実の不安と絶望を超越的で理想的な空間を通して仮装し、その中で観念的ではあるが平穩を得ようとした‘知的虚偽性’の実際の根源になる。このような面で張龍鶴の思考は戦後現実の絶望と不安を西欧モダニズムの危機的世界観と等価関係に置き、現実的な具体性を抽象的な普遍性に転換させる新世代的な意識の代表的なケースに該当する。彼は新世代が抱いていた既成世代と戦後現実に対する反抗、歴史的価値に対する懐疑、虚無意識をそのまま持っていて、これを西欧的な意味の‘実存’という概念のもとに実在化しようとした。彼は新世代が持っていた現実に対する絶望と危機意識をそのまま持ちながら、これをより抽象化させ、一つの神話的な空間を創り出している。そしてこの神話的な意識は現実の中に実在的な自我を解体し、そこで得た強烈な反抗意識を超越的な理想の上に置くという点で新世代的な絶望意識と同じ櫃に入れる。<sup>32)</sup>そしてこの虚無意識こそが戦後の現実において現実と理想を主観的に融合していた知覚階級の絶望と反抗の現実をそのまま代弁しているのだ。<sup>34)</sup>

張龍鶴が持っていたこのような絶望と反抗の精神は一方で現実を自分が追求する理想的な空間に抽象化させるが、一方では現実に対する強い否定の精神とその意味を込めているという点で注目する必要がある。現実世界を全面的に拒否し、超越的な理念の世界に執着するのは現実にも具体性を組み入れない事で虚無主義に落ちいる公算が大きいのが、反面強烈な現実批判の意味をもとに持つためである。「円形の伝説」で示されるイデオロギーの虚偽性に対する強い告発や自由と平等の概念に対する新しい解釈は当時、戦後の政治体制をみる彼の現実感が何であったのかを推察できる。韓国社会がイデオロギー的な対立に直面

し、‘自由’という意味で体制の優越性を強く主張しているが、その‘自由’という概念自体も虚偽である事を作品では如実に糾明している。作品で‘自由’が‘平等’という意味と分離されないという点、そして概念が互いに対立するものではないという事も何回も説明しているのもこれと関係なくはない。張龍鶴にはむしろ‘自由’という名の下で民主主義的な理念が失踪し、その空白に代わって経済的な窮乏と政治的、社会的な疎外が残っている現実自体が問題になる。従って彼の文学には50年代の韓国社会の国土の窮乏化と独占資本主義下の跛行的な政治性、官僚体制下の規範的な統制などに対する強いピンチヒッター的な意識がこびりついていて、この点が理想的な空間の追求を通じ、現実全体に対する否定、アレゴリーを通じた現実の風刺などの根本的な原因になる。彼の別の作品「現代の野」では主人公が経験した悲劇的「生」がまさにイデオロギーから始まっている点を強く主張している。南でも北でも主人公ヒョン・マヌにはどこにも自由に安住する事ができる場所はなく、結局組織と法律、合理的方針という仮装された論理が支配する南の社会で自らスパイだという冤罪を被り、死に至る。張龍鶴がみせるこのような現実意識は南であれ、北であれ、どこにも安心して住む事ができないという強い体制批判の性格を帯びているが、この現実に対する否定意識はそれが戦後の現実で具体的に提起され、受け入れられないという点で絶望的な認識とともに共有している。彼の作品が最低限の現実的な具体性も確保できなかったのは、この絶望が現実に対する拒否と超越主義で瞬間的に還元されるためである。「円形の伝説」でこのように強い現実批判を基本的な精神にしてイデオロギー、体制、規範、倫理、「生」の形式までも否定する傾向を帯び、この点が世界自体を否定的にみる虚無主義的な思考に続く。現実に対する価値を少しも受け入れられないという彼の意識が新世代作家の中でも特異な文学的形式を作り出している。

#### 注

- (1) 作家、1921年生～咸鏡北道富寧出身、代表作としては「非人誕生」「易姓序説」「ヨハネ詩集」「円形の伝説」等があり、特徴として既存の文学的慣習の破壊、漢字語の導入、意識の流れの手法を導入し、既存制度に対する拒否などが挙げられる。
- (2) 1950年代文学において既成（旧）世代、新世代の区分は重要な意味を持つ。50年代戦後文学は前半期と後半期に分ける時、この2つの世代が実質的な文学の担当をしていた。50年代全体の時期にかけて文学的な理念がこの二世代間の強烈な争いの中で成長している。50年代中盤以後、文壇の中心問題に登場する新世代論と伝統論（既成世代論）、ヒューマニズム論は、この二世代間の理論的な争いで始まっている。文学的傾向においても既成世代と新世代は明らかな差異をみせる。既成世代が以前に自分たちが追求した文学的方法を持続してきたとしたら、新世代の立場は既成世代的方法を自然主義的なものと批判し、人物の内的体験を強調する新しい方法をとっていた。50年代の戦後

文学は文壇の主導権と文学理念，作品傾向など，すべての面で既成世代と新世代が互いに対置され，衝突しながら発展してきた時期である。

- (3) 白鐵（ペク・チョル）はこのような新世代文学の傾向を3つの面で特色があると言い，まず新しい物を創造しようという積極的な態度，二番目に現実を全体的に把握，批判する知的な態度，三番目は作品の方法的な技術態度に新しい特質を掲示するもので既成作家の態度と区別する事を試みた。白鐵「新世代的인 것과 文學」『사상계』1955, 2 p38
- (4) 李英一（イ・ヨンイル）  
「차원의 이질성과 지양-50년대문학의 업호와 반성-」『예술집단』1955.12.p65
- (5) 송옥（ソウ・ウク）  
「작가의 형성과 환경」『사상계』1957.9.p55
- (6) 李英一（イ・ヨンイル）1932～文学評論家
- (7) 前掲（注4）p60
- (8) これは広い意味での新世代的な普遍性を総括している言葉である。一般的に新世代が西欧文学の方法論によりかかり，既成世代を批判し，文学の現代性を論じた。
- (9) 新世代の既成世代に対する批判は主に白鐵と金東里に集中される。新世代作家たちは彼らが（白鐵，金東里）が「沈黙を守っていて新春文芸や文学賞シーズンになるとわが物顔に振舞う」と言い，彼らの文学的行為が「自分の位置を維持させる汲汲としたもの」に過ぎないと批判する。それだけでなく彼らを「旧大陸を守るため新潮流をくいとめる防波堤の番兵という意味で新世代の敵」と規定する。張龍鶴「感傷的發言」『문학예술』1956.9 pp171～172
- (10) 前掲（注9）p173
- (11) 同上 p174～175
- (12) 彼はドストエフスキーとサルトルの作品に影響を受けたとこの文で言っている。また実存主義文学を<ドストエフスキー - 神性=サルトル>と公式化している。
- (13) 新世代作家の作品の中に現れる現実拒否，現実不安の姿は20世紀モダニズム思想が持っていた不安，恐怖，絶望，不条理，虚無的な要素と無関係でない。孫昌涉（ソン・チャンソプ）の現実憎悪と非情な世界の描写，金聲翰（キム・ソンハン）の風刺と嘲笑を通した文明批判，張龍鶴（チャン・ヨンハク）の現実拒否と観念的な理想世界の追求，吳尙源（オ・サンウォン），鮮于輝（ソヌフィ）の行動を通じた状況の中での「私」の追求は大部分20世紀的な現実状況と人間の存在という西欧モダニズムの根本問題を暗暗裏に一つの普遍性として内面にあるものだ。そしてこの普遍性が一つの課題として韓国文学の近代性とその克服の問題を提起する事ができ，その面で彼らの文学において新しい人間関係の問題，技法の問題を言及する事ができた。彼らが西欧文学の影響を強調し，伝統不在を掲げ，既成世代に対する露骨的な不信を表明するのも西欧思想の普遍性の上に韓国文学の「現代性」という課題をうち立てるという事と関係がある。최담희 「신예작가는 이렇게 말한다」『문학예술』1959
- (14) 前掲（注9）p174
- (15) 특집해설 「형이상학적 소설의 가능성」『새벽』1960
- (16) 변화영 「강용학 소설연구」전북대 대학원 1992.p3
- (17) 張龍鶴の小説に対する評価の多様性もまたこれに起因する。単純に新世代的な特異性の中で彼の小説は戦後現実に対する挫折と絶望する人間の条件に対する反抗の小説として見なされている。また西欧実存主義思想を韓国文学に適用した作家として評価する事もできる。しかし彼の小説が韓国現実の具体成を脱け出し，徹底して西欧的なものを意識しながら創作されていたのを助案すると彼の小説内容や技法もやはり虚偽性を持ち，摸倣的なものでしかないといえる。従って大部分，彼の小説は否定的観点から観念的で新鮮な理念小説に分類される。彼の小説に対する主要な研究をいくつかみてみると次のようである。  
천이두, 「안타오스의 자유」『현대문학』1960.11

- 이준재, 「존재의 고뇌와 자유의 의미」 『세대』 1963.12  
 김교선, 「심리적 지적 사색과 소설적 형식」 『현대문학』 1964. 5  
 이철범, 「장용학론」 『문학춘추』 1965. 2  
 임현영, 「장용학론」 『현대문학』 1966.11  
 서수생, 「장용학 소설에 나타난 저항의 문제」 전광용 외, 『한국현대소설사연구』 민음사, 1987  
 김신경, 「장용학의 실존주의 주용 영상에 관한 연구」 중앙대 대학원 1990
- (18) ‘人間的という表現は物質文明と機械文明に疎外された現代人間の姿を象徴するものだ。作家は現代社会の人間と人間関係を‘人間的’という表現を使い、すべてのものが人為的で虚偽的なものである事を強調する。これと反対にあたる意味は‘人間’という表現で真正の主題として人間存在の本当の姿を象徴する。例を挙げると実存主義でいう‘存在が本質に先行する’という表現と比較してみるとこの時存在は‘人間’, 本質は‘人間的’という事になる。彼はたぶんこの点を念頭に置いてこのような表現を用いたようである。
- (19) この点は「円形の伝説」が抽象的な超越性を基盤にし、虚無主義に落ちいるしかなかった根拠になる。現実の世界を完全に否定するという点と現実の世界でどのような展望を持ってないという点は現実世界よりは死を通した理想的な空間で完全な世界を追求する事になる根本的な基盤になる。それが叙事過程で具体性よりは理念的な普遍性を強調するアレゴリー的な性格として現れる。
- (20) 張龍鶴, 「작가의 변(辯)」, 『세벽』, 1960. 8 .p245  
 (21) 張龍鶴, 「실존과 요한시집」, 『한국전후문제작품집』, 신구출판사, 1963, p400  
 (22) 前掲(注9) p175~176  
 (23) このような面で見ると彼が認識している実存主義、即ちサルトルの思想も誤りがある事がわかる。サルトルの実存的自学(実存が本質を先行する)という本質に先立って自分の本質を創造し、この本質を人間の自由による‘何’で成立する事を言う。この自由によって成立した人間は同時に世界(状況)の中での‘私’の成立を企てる事になる。そしてここでサルトルの自由、選択、責任の概念が現れる。張龍鶴がサルトルの実存哲学の影響を受けたというのはただ状況の中に独立した状況で現れる個物から‘私’の発見をいうただ初歩的な認識に滞っている。この点で彼の考えはサルトルの実存哲学に比較するのは全く無意味な事だと言える。(張龍鶴を他の論文の中で多くがサルトルの実存主義と張龍鶴の関係を論じている)むしろ彼の考えは絶望と不安を実存的な個物認識としてみている。「실존주의와 휴머니즘-사르트르의 경우」 『문학에줄』 1957, pp190~195  
 (24) 前掲(注9) pp175~176  
 (25) 同上 p178  
 (26) 김교선, 「심리적 지적 사색과 소설의 형성-『원형의 전설』의 현대적 의의와 표현상의 맹점-」, 『현대문학』 1964. 5 .p278  
 (27) 張龍鶴, 『원형의 전설』 1962. 9 .pp366 367  
 (28) 同上 p394  
 (29) 張龍鶴が南へ渡り、経験した作家としての窮乏生活と母親の死は 実在とヨハネ詩集 で実際に表わされている。彼はここで作家生活の貧しさと孤独、そして苦勞の果て、死んだ母親に対する悔恨を吐露している。  
 張龍鶴, 「실존과 요한시집」 『한국전후문제작품집』 신구출판사, 1963.p402
- (30) 김동한, 「한국 전후소설에 나타난 현실의 추상화방법연구」, 한국현대문학연구회 편, 『한국의 전후문학』 태학사, 1991.p210  
 (31) 同上 p211  
 (32) 張龍鶴の場合、資本主義的な現実に対する具体的な認識が希薄で、現実の不安、絶望がほとんどでこのような認識が現実的な空間を回避するための‘原初時代’や‘天動時代’の前近代的な抽象的空間を設定している。

- (33) 이봉래, 「신세대론」, 『문학예술』, 1956. 4
- (34) 崔一秀は根本的に虚無主義が知識階級の孤立感, 即ち個人と社会, 現実と理想が調和を成さない所に出現しているとみる。彼は虚無主義が個人と社会全盤が分裂され, 知識階級の機能が現実的に喪失された転換期に登場するとみて, 知識階級がこのような分裂相の克服を内面的な世界, 主観的な世界の中で探した事を意味する。実際, 知識階級の現実的な挫折感の克服は現状では不可能であり, 内面の世界, 主観の世界でしか可能にならない。この点が現実を超越し, 抽象の世界へ行かざるを得ない根本的な原因になる。崔一秀は, 知識階級のこのような属性が現実を拒否し, 反抗する傾向として現われ, これは現実に対する不安と絶望のまた別の表現であるとみた。
- 최일수, 「니힐의 본질과 초극정신」 『현대문학』 1955.10
- 引用文の漢字は, 人名, 題名を除いて常用漢字に改めた。

### 参考文献

- 丘仁煥共著 「韓国現代長篇小説研究」 三知院 1989
- 김윤식 「한국현대문학사론」 한샘 1998
- 김윤식 외 「한국현대문학사」 現代大學 1989
- 조건상 「1950년대 문학의 이해」 성균관대학출판부 1996
- 한양어문학회 편 「1950년대 한국문학연구」 보고서 1997
- 송하춘·이남호 「1950년대의 소설가들」 나남 1994
- 全光鏞 「韓国現代小説史研究」 民音社 1984
- 천이두 「한국현대소설론」 형설출판사 1969
- 白鐵 「한국전후문제작품집」 신구문화사, 1984
- 辛卿得 「韓国戦後小説研究」 一志社, 1983
- 金相善 「新世代作家論」 白新社 1982
- 張龍鶴 「現代韓国文学全集4」 新丘文化社 1967
- 「素材노우트」 한국문학 1966
- 「感傷的發言」 文学芸術 1956
- 「放談 뛰어넘었느냐? 못넘었느냐?」 思想界 1962
- 「不毛의 文學風土」 사성계 1965. 7
- 「圓形의 傳説」 三中堂文庫 1977